

**チェアパーソン：ドミニック・フォレ** スイス連邦工科大学ローザンヌ校 (EPFL) 教授

エコノミスト誌のタイトルの引用になるが、20世紀は「多大な学習」の時期であったと言えよう。この変革期の終結にはほど遠く、知識型経済に向かう国々では、教育および発明のフロンティアの開拓、新しい人的資源のマネジメント法の開発など、チャレンジは更に続く。このセッションでは、下記の4つの問題に焦点を合わせて議論を進める。

1. 新しいと言えども、今日必要とされるスキルは実は古くから存在した？

知識型経済が必要とする技術および能力の調整において、中核となるのが人材の教育と養成の課題である。修得すべきスキルには多種多様な能力が含まれ、単に「コンピュータの使い方を知る」というレベルのものではない。認識能力、インターアクションを取る能力など、その根幹にある能力の修得を促進することが問われている。

2. 既存の教育・人材養成システムは知識型経済への移行に貢献しているか？

社会的な行動力、ICTに関わるスキル、創造力など多岐にわたる能力の修得が求められる今日、学校教育で「何がうまくいくか？」という問いに答えるのは、決して容易なことではない。過去20年を振り返ると、産業界、政界、民間から教育システムに対する不満の声が数多く聞かれたことも象徴的である。

3. 教育システムは研究開発R&D活動の質及びレベルに影響を及ぼすか？

研究基盤の構築というプロセスの背後には、研究開発投資と人的資本の補完的な関係が存在する。研究開発政策の多くは、税制措置、補助金を使い、民間セクターにおける科学者・エンジニアの需要に刺激を与えることを試みている。その成功は、教育システムがこれらの需要に積極的に応答し、人材を供給することができるか否かにかかっている。

4. 我々の大学はグローバルに展開される優秀な教員・学生獲得競争に討って立つ準備ができているか？

グローバル化は人的資本にも及んでいる。国境を越えた人的資本の移動は、多国籍企業のみならず、大学においても一般的なプラクティスとなりつつある。大学の活力は、教員・学生の質に左右される。従って、世界中から優秀な教員・学生を引き付ける力を高めることが大学にとって重大事項となっていく。